

協議会ニュース 43号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 1993.1

マンサク (マンサク科)

1992.1.29

定光寺にて

グレーの冬空は
まだ寒々としています
枯木の雜木の中を行くと
ごとほんのり黄色いリボン
マンサクの花に出会い
嬉れしくなります。



又11月頃
秋の陽光にオレンジ色
輝やく黄葉は殊に
美しいものです

たまに樹下で
4コの種子を
持つた実も
見付かります

自然観察雑感

協議会副会長 竹内 哲也

会長さんが長期研究調査旅行中とのことで急に小生が貴重な紙面を汚すことになりました。平成五年度は酉年と言うことになるべく鳥類に関する話題をと苦慮しましたが、その面の知識に乏しいので主に植物と鳥の関係について、近頃小生が体験した事柄を四方山話的に書くことでお許し下さい。

おやっ（意外）

去る10月7日、佐久島の西海岸でカワセミを見ました。カワセミの生息地は山間の渓流であり、決して塩水の場所ではないと思っていたので意外でした。自分がいまどこにいるのか分からなくなりました。また、極度の疲労のための幻影かとも思いました。近くに真水の所はないかと地図で探しましたが無駄でした。航空写真も見ましたが、それらしい所はありません。こんな事を他人に話したとて、海辺の塩の飛沫がかかるような場所でカワセミがいたなどと言っても信用されるはずがないとも思いました。啞然と眺めているうちに写真を撮り損ねました。知識不足のために別種をカワセミと誤認したのでしょうか。やがて、カワセミは陸側へ飛び去っていきました。何年か前に両岸と底がコンクリートで固められた田園の小川でカワセミを見たことがあります。巣穴は川の反対側の水田の縁にあったのです。この事も意外な事実でありました。教科書や他人から得た知識を鵜呑みにすると意外ということになるのでしょうか。例外は幾らでもあります。自然観察の醍醐味の一つでもあります。

なるほど（納得）

最近、都市環境の樹林にシロが増えたといいます。都市化のために気温が上昇してきているという人もいます。こんな知識をもって、知多半島の森林を観察すると、草本層のワジュロの被度・群度がたしかに高いのです。気温が上

昇したとて、鳥が種子を運ばなければこのようないい事は無いでしょう。他人の論文に納得というところ。

おやっ（意外）

あれはなんだ、ここは海岸ではないか、どうしてこんな所に育っているのだろうか。エノキに寄生しているヤドリギである。ヤドリギは、山地に多いという観念が離れず意外に思うのです。植物目録を鵜呑みにしたために記録に無い物があると、おやっと思いつき自己を疑う事になるのです。ヤドリギの種子は鳥によって運ばれます。そういえば昔、京都市内の庭木にたくさん寄生していたことを思いだしました。その昔、スキー帰りの先生に標本を見せてもらって以来この種は山地にしかないような誤解を抱いてしまったのです。その後、沿海部では渥美半島の道路脇に寄生しているのを見たことがあるのに今もって、おやっと思うのです。

そんな馬鹿な

30年前になるのでしょうか、知多郡の篠島の一角にアシタバの自生があることを植物の研究家の先生に話したところ、そんな馬鹿な、それはハマウドだろうと言って、相手にしてくれませんでした。図鑑の記載事項からの知識ではなかったでしょうか。その後、知多半島の富具岬近くの樹林内にこれを見ました。古い文献には篠島と南知多町に自生していることが記載されています。植物目録を作られた方は偉い人だと思います。

やっぱりそうか

五万分の一の地図などから判断すると海岸の砂浜は殆どない。実際に歩くと、護岸堤防の海側に新たに砂が堆積している所があったり、海岸崖の下に小規模な砂浜があったりします。そんな所にハマグルマが生きてます。その場所に新たに進出してきたものなのか、昔から生えて

いたものなのか、環境を考察することが大切だと思います。自然海岸であった頃には生えていなかったアイアシやハマサジが護岸工事の位置と形でかえって塩の飛沫が多くなって今までの記録にないものが生えてきています。ハマサジは潮流にのって飛沫と共に塩沼地的な海岸に生え始めたのでしょうか。小躍りするほど嬉しい事でした。

だから

鳥・むし・獣・風・波などの自然は、自然環境を復活するのに大変重要な役割をもっています。人が苦労して構成した環境はどこか無理があります。自然を大きく観察する事も大切な事であると思うこの頃です。

苦し紛れに、つまらぬ内容で紙面をうめました。ご容赦下さい。

会員の皆々様、酉年にあやかって1993年が大きく飛躍する年でありますようご活躍を期待します。

会員の動き

【加入】

松井 寧一（名古屋支部）

〒453 名古屋市中村区則武 1-1-7-805

☎ 052-452-8159

【脱退】

東本晃一（尾張支部）

【住所変更等】

堀田昭二（尾張支部）

〒456 小牧市堀ノ内 4-9

竹村武雄（知多支部）

〒474 大府市桃山町2丁目 14-1

☎ 0562-48-2302

簡単なウッドクラフト ⑤

名古屋支部 椿 幹雄

カンナ屑を利用して郵便ハガキを作つてみませんか？

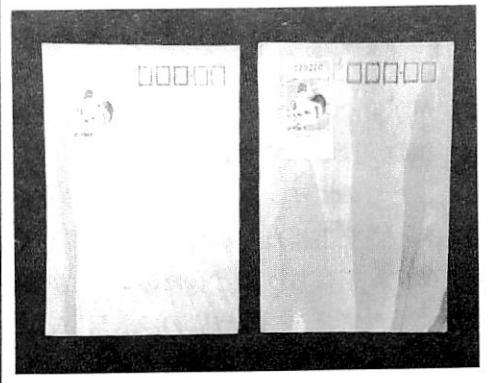
I. 準備品

- 1) カンナ屑（長さ16cm幅24cm表裏分）
- 2) 台紙（ケント紙16×12cm）1枚
- 3) 木工ボンド
- 4) ハガキ（定規に使う）
- 5) ヘラ

II. 作り方

- 1) カンナ屑の幅が狭いので数枚のカンナ屑を並べ、12cm幅を2まいつくる。
(表裏分)
- 2) 台紙の表側にボンドをヘラで塗り、のばす。
- 3) 台紙にカンナ屑を貼りシワにならな
いようにのばす。
- 4) 台紙の裏側も表側と同じ工程を繰り
返す。
- 5) 乾いた台紙にハガキをのせて輪郭を
書きハサミで切り郵便番号の枠印を入
れ完成。

III. 通常ハガキの重さは2g～6gの範囲
ですので厚紙を使用する場合は重量オーバーにならないようにならう。



愛するフィールド

尾張支部 三輪治代美

私のフィールドは、名古屋市の東部丘陵地です。八才の時にここに引っ越ししてきました。それまで都会っ子だった私にとって、それはちょっとした事件でしたが、（ご他聞にももれず、いじっめっこにあったり・・・）愛するフィールドに出会うというすてきな出来事だったのです。

さて、絵図面を見て下さい。私のフィールドはこんな感じです。私のうちは、通りの突き当たりから少し坂道①を登ったところにあります。Vの字型に道に囲まれたところが私のうち②です。うちの回りが広い意味では全部フィールドなのですが、ポイントは2箇所あります。ひとつは、坂道を登った右手の道沿いにある柿の木畠の小道③を入って裏山④に登るコースです。山といいても、せっせと歩けば15分くらいで稜線に着いてしまうような丘のようなのですが、この道が結構楽しい。艶やかなのは、やはり春で、ヤマツツジを主に2、3種のツツジの花が、まだ葉の繁っていないぼんやりとした薄いこげちゃ色の林床の中のあちこちに咲きます。実はこの山、稜線は完全な禿山です。マツが多い山なのですが、健全にもマツの実生が多くて発展途上中ののが楽しみです。

もうひとつのポイントは、Vの字型の左手の道をいった突き当たりから林に入っていく小路⑤です。道はちゃんとしたのがいつのまにかなくなって、林や原っぱの歩き易いところを勝手に歩くとまた小路があらわれるといった感じです。身の丈以上のササ野原とか、マツの実生の点在する荒れ地、セリのある湿地、20センチクラスのツクシのでるところ、

スミレの群生する休耕田・・・かるく2、3時間は楽しく遊べます。

— そうなんです。里という感じです。最初に話した坂道を登る前は、家の隣りは家という住宅地なのですが、この坂道を登ると里がひらけるというわけです。



愛するフィールド

「わかったからそこはどこなんだ?」といわれそうです。名東図書館の南側500m位のところでした。「でした?」そうなんですがめんなさい。もうこのフィールドは、私の心中にしか存在しないのです。土地区画整理によって、板チョコの様に盛り土をした何にもない—土しかない—平野になってしまったのです。名東図書館の斜め向かいに当たるグランドには、とても大きな池がありました。菅廻間池というのが正式な名前だったそうですが、土地の人は「しげのさま」と呼んでいました。池の岸には見事な松林があって池にその姿を移し日本庭園のようでした。今は、何も残っていません。ブルトーザーの威

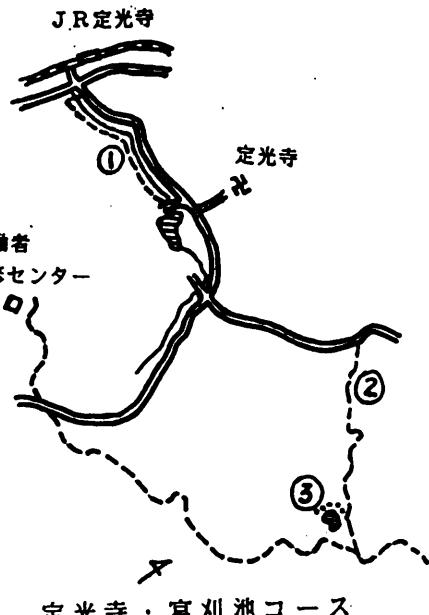
力はすさましく、ほんとに短い期間に、山の土は谷に埋まりました。たくましくもカエル達は削り跡にできた大きなみずたまりで、卵を生んでいましたがそれも間もなくなりました。私は、急に見知らぬ土地に放り出された気がしました。どんな都會でも命の温もりというものがあるものですが、そんな自分をおおってくれるものが急になくなってしまったのです。区画された土地は本当に長い間、何も利用されませんでした。現在ようやく住宅地の姿になってきましたが、無理矢理矯正してしまったもののすさましさというのでしょうか、潤いというものを感じられない町並みになっています。都市化というものは、もう少し時間をかけて行われるべきものという気がしています。土地利用度が高い、整備できるという利点は、整備地が長い間使われなかつたこと、よその人やタクシーの運転手等が「解りにくいところだ」嘆いてたことから余り達成されたとは思えないのです。

さて、だまってしまったおわびに、実在のフィールドの紹介を少ししたいと思います。定光寺の宮刈池コースです。宮刈池は、ご存知の方も多いと思いますが、定光寺の東、東海自然歩道に隣接する池です。この池には、

JR定光寺駅から御手洗川沿いの遊歩道①を楽しんでから、行くとよいと思います。定光寺前の道路から宮刈池までの林道風の道②は、虫屋さんによく出会う道です。春には、ハリリンドウドウ、ショウジョウバカマ、シデコブシ、ミカワチャルメルソウ、タチツボスミレ、マキノスミレと軽い登りの散歩道を楽しむことができます。いったん登りきった左手が宮刈池です。

宮刈池は、林に囲まれた小さめの池です。身の丈ほどのササに埋もれそうな小道③を入っていくと、左手に池にでられるところがあります。（わかりにくいよ）春には、ササの下にショウジョウバカマなどが見られます。また、池にはホソミオツネントンボなどのト

ンボがいて彼らを見ていると時の立つのも忘れてしまいます。しかし今は冬、でも池の回りの林や、池の端のスゲなどが水面に移っている姿を見ているだけで心がなごんできます。



定光寺・宮刈池コース

私がこの池やこのあたりを好きな理由は、さきにお話した昔のうちの回りに少し似ているからかも知れません。

来た道を戻って、先ほどの林道にでます。池の向かい側には、清水がしみでているところがあって、思わずほほえんでしまいます。こんな小さなものを見つけるのもひとつの楽しみです。

さてこの後は、まっすぐ鉄塔沿いに登って昆虫を楽しむコース、労働者研修センターへ向かう稜線コース、ちょっとサバイバルな沢くだり付きの無名池コースといろいろなコースをとることができます。私の好きなのは、無名池コースです。ホウノキの道を通って、アギスミレとコバントビケラのいた（先日、エグリトリビケラと同じように池に落ちた葉でもっと立体的に巣を作る→を発見）無名池から、沢くだりの道を里へ降りるコースですが、かなりわかりにくく、ここで紹介するのは、難しいのでやめておきます。行きたい方は、声かけて下さい。ご一緒したいと思います。



▲ 冬の宮刈池

行 事 報 告

【理事会】

- H4.11.21（土）於中小企業センター
- 出席：12名
- 内容：平成5年度事業について

自然観察会については、広報のますさが問題であり、次年度は各支部のやり方等を検討してみるとともに、支部内だけでなく会全体としての広報を考えることとした。また、全県一斉自然観察会は来年度も継続することとし、終了後結果を十分検討する。

研修会は、おおむね今年度と同様に行うが、楽しい内容の中で基礎的な知識も得られるものを考えていく。なお、会員の交流を深めるようなものも検討したい。

その他、来年度は自然観察指導員講習会があり、協議会としてもこれに協力する。また、県からの受託事業は自然観察コース案内書の作成（3年間）になる予定である。

支部の会員数の増加に伴って、例えば支部を分割するなど、支部のあり方を検討することとする。

総会は、会員の活動状況等の展示を行うよう検討する。講演の代わりに映画を行ってはとの意見もあった。

（佐藤）

石巻山指導員研修会

東三河支部 間瀬 美子

12月5日～6日、豊橋市石巻山に布谷和夫さん（日本自然保護協会普及員・琵琶湖博物館開設準備室）をお招きして指導員研修会が行われた。「自然観察の方法について」をテーマに、講師を中心にして会員の意見発表も交えながら充実した研修が行われた。

「いつでも、どこでも、だれにでも」できる観察会とするために、専門的知識を持つ人、特に持たない人、それぞれに工夫すればよい観察会がもてるなどを実例を挙げて分かり易く解説された。

知識がなくても工夫次第で楽しくできるが、指導者も勉強して観察会にあたれば、教える方もより面白くやれるのではないかという、ギクッと居づまいを正すようなお話もあった。

下界が光の海なる頃、食事をしながらの情報交換に飽き足らず、布団をわきへ押しのけて、某氏持参のレミーマルタンをなめなめ、豊橋名産の柿をかじりながらの自然談義は布谷さんの気さくなお人柄もあり、まさに知・徳・体？の大集成！ 布団に埋もれて眠りこけていた人の他は全員、知識・教養が高まったはずであります。ちなみに、参加者総勢14名、内女性3名。けっこ、のさばっていたことを、ご報告しております。

翌日も穏やかな天気。東三河支部の高橋康夫さんの案内で気分もさわやかに石巻山の巖頭を征服した。青緑に輝くヤマアイの群落。いまもはじけて飛びそうな実を付けた、コクサギの黄葉。

自然と人、人と人とのつながりの大切さを実感した研修会だった。

LETTERS ON NATURE

Naturig №44 1992.11.22 小雪
大竹 勝 発行より

西の池のカモ

富岡の西の池では毎年カモが見られるので、11月20日に出掛けました。小雨が降っていたのですが随分たくさんのカモがいます。殆どがカルガモで150羽ぐらいです。以前はコガモが多かったのですがこの日はコガモは数羽しか見られません。なぜかマガモが2羽だけ混ざっています。この日はカワセミのダイビングも観察できました。先日、馬堤池でハシビロガモを観察したのでまわってみたところハシビロガモがいなくてコガモが数羽だけです。木曽川のカモはどうだろうかと見に出掛けましたが、あ

まり数は多くなくおまけに雨で視界が悪くよく観察できませんでした。11月27日同じコースで観察に出掛けました。西の池では殆どカルガモで100羽ほど、この日はマガモがいなくてオナガガモが4羽とコガモが数羽、カイツブリのヒナが2羽観察できました。馬堤池ではホシハジロが1羽だけ観察できました。市内の池は小さいためかあまり定着していないようです。木曽川では犬山城の下のライン大橋上ではマガモとコガモが主でカンムリカイツブリが3羽で例年より数が少なく、ライン大橋下流の木津頭主工に出掛けたところ見ました。ここでも数が少なくマガモ、オナガガモ、コガモ、ハシビロガモ、カワアイサぐらいです。下流の狩猟圧がまだ少ないせいか、あるいは今年の飛来数が少ないので分かりませんが、木曽川ではカルガモが少ないので今年の特徴です。

「豊田市自然観察の森」からの便り

越 冬 昆 虫 の 野 外 展 示

尾張支部 長尾 智

種 名	状態	数
クサギカムシ	成虫	47
ヨコヅナサシガメ	子虫	10
ユミアシゴミムシダマシ	成虫	1
ゴキブリの一種	子虫	2
クモの一種	成虫	3

た時、水際にあった板の下に点々と18匹ものヒメタイコウチが越冬しているのを発見しました。

これらを参考にして、野外展示の仕方をもっと工夫してみようと思っています。



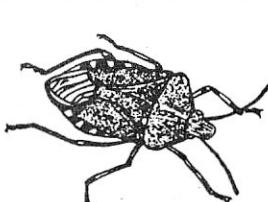
キアシブトコバチ

(体長6mm内外)

12月初旬、研修室の一角に數十匹のキアシブトコバチの群を見つけました。それぞれ越冬場所を求めて集まつて来たものと思われます。日だまりでモゾモゾと動いていましたが、窓の下で死んでいるものもいました。多分乾燥に耐えられなかったのでしょう。生存者は外へ放してやりました。

このような越冬昆虫を生かしたまま観察できないかと考えて、昨年「越冬昆虫の家」を作りました。これは、疊を立てて並べて入れただけの箱ですが、箱のすき間から入った昆虫は、疊と疊の間に身を隠すことができます。前年の冬の調査結果を右の表に示しておきます。

ところで、12月中旬、ある湿地を調査してい



クサギカムシ

(体長約16mm)



ヒメタイコウチ

(体長18~22mm)

コックピットから見た雲

知多支部 加藤 寿芽

さる12月4日、ハワイ州ホノルル空港から名古屋空港へ帰る際、日本航空のジャンボ機747型のコックピットへ入る機会に巡りあえました。747型では自分の座席は後部座席でトイレより3列前という位置でした。飛行機は5度利用しましたが、その都度雲の観察をしてきました。ハワイからは約8時間の飛行でしたが、窓から雲を見るのが楽しみです。後部の非常脱出口で見ていたが、スチワーデスさんが折りたたみイスの利用を許可してくれ腰掛けて雲のスケッチすること2時間、その時コックピットへいきませんかと話がありました。「エッ、コックピットに入ってよいですか?」「ええ、機内電話で連絡してみます。」「どうぞ」スチワーデスさんに案内されて操縦室に入りました。



約30分入室していましたが乗務員3人が親切にいろいろ話をしてくれ、気象用レーダーの資料や天気図などを記念に戴きました。高度1万1千メートル、外気温-54°C、レーダーで周辺の雲、前方の積乱雲の様子など操作して説明してくれた。この位の高度からは下層の雲は比較的高く、高層の雲は低く感じられるとのこと。また、乱気流に何時間後に遭遇するか分かることです。積雲系が多く見られ遠くにはウォール状の雲、前方では積乱雲の頭部が見られました。この雲の頭部は1万3千メートルもあるそうです。

雲の研究は昭和40年からカメラを教室まで持

ち込み授業の片手間(?)に雲を撮影しましたが皆地上からの写真で、高くて富士山の五合目からの雲海の写真です。コックピットからは初めての観察でした。自分の肉眼では初めてです。それより高いものはTBSの秋山さんがソ連宇宙船からの飛行中のものはビデオ撮りをもっています。

花・水・緑の市民フォーラム参加報告

名古屋支部 武田 篤

10月17・18日の白鳥センチュリープラザにおける《花・水・緑の市民フォーラム》では、急遽1ブースの展示を持ちました。テーマは「今話題のウエットランドとその生き物たち」として、池の生物の顕微鏡写真と湿地の風景をメインに、マングローブ林、干潟のパネルを加え、湿地・池の調査報告書などを並べました。もちろん湿地研の案内も置きましたが、あっという間になりました。

同じ時期に、大津で「アジア湿地シンポジウム」が開かれ、そちらへはレポートの提出だけになりましたが地元で展示ができて、とても効果的でした。展示の半分ほどは英語の資料でしたが東南アジアからシベリアまで私たちのネットワークを示すことができました。農政緑地局の担当者や環境保全局の方もサンショウウオや世界最小のトンボがいるのかと、熱心に見ていました。農地緑地局の局長さんも庄内川にアユがいるのかと感心しながら、その稚魚が藤前の浅瀬で育つと聞いて、少し困った顔をしてみました。それにしても水辺関係の展示を指示された西尾市長さんには感謝感激です。是非ご本人にもみて頂きたかったです。

(名古屋支部 なんじゃもんじゃ通信より)

春の七草

特にコオニタビラコについて

知多支部 相地 満

1 はじめに

セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロこれぞ七草

野菜を野の菜とするならば、野菜の少ない冬季に七草を摘み、食することは栄養学的に随分と価値のあったことでしょう。今では何時でも野菜が手に入る時代なのに、何故か正月になると七草が売りに出されます。しかもかなりの高額で取引されています。多くは5~6種類で1セットになっていて、七草が全部揃っているものは少ないようです。その理由はホトケノザが現在かなり入手しにくいことにあるのでしょうか。

2 ホトケノザとは

図鑑で見るとシソ科の中にホトケノザの名前を見出すことが出来ます。名前を知らなくても「ああ、この草ならどこかで見たことがある」と思う人も多いことでしょう。ピンクの愛らしい花を付けるこの草はいかにも七草中の名花に見えます。だがこの草は食べると下痢をし、とても食べられるものではないといいます。

七草にいうホトケノザとは、キク科のコオニタビラコとするのが今では定説になっています。でも、かつてはこれ以外にもホトケノザと呼ばれた植物がいくつかあったようです。ムラサキ科のキュウリグサ等がそれで、それらは冬季に美しいロゼットを作ります。

このロゼットを「仏の座」と考えたところに一連のホトケノザという同名異種の植物が生まれた理由があります。やがて春、「仏の座」の中心から花茎が伸び、その先に愛らしくも美しい花が咲きます。（確かにシソ科のホトケノザは頗るなロゼットを作りません。だが四角柱の茎を取り巻くように叢生する葉は確かに座布団の様だし、やがてその脇から可愛らしいピンクの坊主頭にも似た葉が伸び、管状の花が開きま

す。）何れもホトケノザとは野に敷いた仏様の座布団、居場所と考えられているようで面白い。

3 コオニタビラコの現状

さてこのコオニタビラコですが、他の七草中のセリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラのようにどこにでもみられるという状況にはありません。

東海市においても大変少なく、大田町に1か所、富木島町に2か所を知るのみです。それもほんの狭い範囲にのみ、毎年出てきます。春先、田のやや湿った部分にタネツケバナのさくころ、秋の霜刈りのあとに芽生えて冬を超したロゼット葉の中から花茎を伸ばし、黄色いキク科の花をつけます。タネツケバナと違ってやや乾いた部分、畦の脇等に出てきます。

かつて知多市の佐布里池周辺、南知多町の内海にはかなりたくさん出てきましたが、佐布里の場合は随分と数が減ってきました。

阿久比町には局所的ですが随分と良く生育しているところがあります。その一つはトウキヨウサンショウウオの産卵場所に隣接した田ですが、春先、湿った場所のタネツケバナと乾いた場所のコオニタビラコが一面に花をつけ、見事に咲きわけています。コスミレ、レンゲとともに、ふと我を忘れるほどの美しさです。こんな日本人の心のふるさとともにいえる田に出会える場所が本当に少なくなってしまいました。

コオニタビラコは現在幾つかの農協で栽培が始まっています。やがて野菜としてのコオニタビラコが注目される日がくるかも知れません。

4 おわりに

現在、日本の食生活の必要性から七草を食べる意義は殆ど無いと思われます。だが人々は七草に興味を持ち、売りに出されると競うようにして買い求めます。正月六日・七日の朝の新聞に折り込まれたマーケットの広告を見ればそのすさまじさが分かります。それは特に都市部において頗るに見られます。私たちはそこに自然と結び付いた文化へのあこがれが根強く在り、文化的な仕種にいかに人々が飢えているかということを推し量ることが出来ると思います。

豊田植物友の会だより

西三河支部 鈴木勝己

アテビ平のキノコ

九月六日（日曜日）は、豊田植物友の会、第二百四十四回の例会で、長野県下伊那郡根羽村、愛知県下では最高峰茶臼山（千四百十五メートル）の裏に当たるアテビ平のキノコの調査です。

ここアテビ平へ行くのは、今回で三度目に当たります。毎度同じようなところへ行って、よくも飽きないと思われる向きもありましょうが四季毎に訪れれば、結構楽しいもので、今回はキノコ狩り、また、違った趣があります。キノコ狩りということで、結構遠方であるこの地へ、八十余名という大勢の人が集まりました。

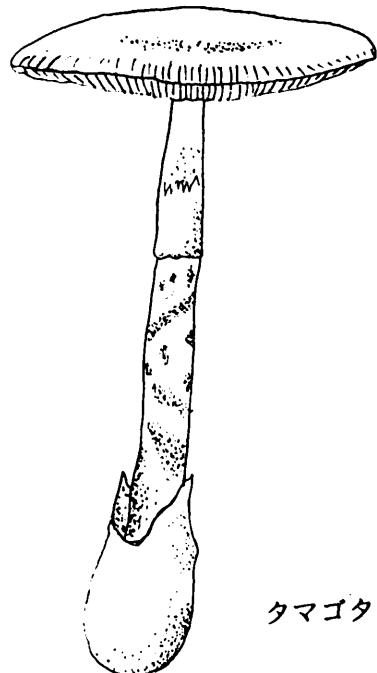
豊田市付近では、残暑の厳しい今日このごろ、キノコはまだまだ、特に、今年のように、雨が少ない年ではキノコは少ないでしょう。

=きれいなタマゴタケ=

余り期待をかけずに、やって来ましたが、売店の裏にはタマゴタケがあると大騒ぎです。見ますと五・六本の立派なタマゴタケです。タマゴタケというのは、はじめ真っ白な卵のようなものが地上に現れ、まるでひよこが出るように、真っ赤なキノコが伸びてきます。成長し切ったキノコは下が白い卵で、上が真っ赤ですから、とてもきれいなキノコです。キノコの図鑑の表紙に、必ずといっていい程、写真や絵が載っています。

色がすごく鮮やかで、毒々しいキノコです。特に毒キノコの一つ、下に壺があるものには、注意しなればいけないのですが、これに反して食用になるといわれています。私はまだ、食べてはいませんが、何せ食べられるというのは、

量的に多くあればのこと、ないから食べなく、沢山あれば食べていただけます。ちょっと勇気も要りましょう。ここだけでなく豊田市の山にも生えるキノコです。



タマゴタケ

=アテビ平の観察地=

アテビ平のアテビというのは、何でしょうか。どうも、この地方の方言で、クロベといいうノキ科の大木をいうようです。ヒノキとアスナロの中間の木で、ヒノキアスナロというのもありますが、木の肌が黒く、下から見上げると空が透かせられるように、葉が混んでないというのが、ヒノキとの違いです。「クロ」というのは黒いこと、「ベ」というのが、木の皮のことのようです。

このアテビ（クロベ）が一面に生え、こんもりしているところをアテビ島といっている一角もあります。

アテビの他、ミズナラ、タンナサワフタギ、イヌブナ、ブナ、モミ・コメツガなどの樹木やザゼンソウ、セリバシオガマなど深山や亜高山性の植物が豊富で、また、観察路がよく整備されているので観察地として、素晴らしいところです。しかし、本日のようなキノコ観察は、クマイザザやミヤコザザが一面に地面を覆っているので、適さないようです。

=アテビ平のキノコ=

探しにくいところですが、八十余名の目で探せば、あるもので、集合鑑定場には、各自それ採集してきたキノコで一杯になりました。種類は多いが、本数はすくないです。

食用キノコは、あまりなく味わう程には、採集できなく、がっかりした一人です。しかし、ここには、ブナやミズナラがありますから、マイタケがありそうです。ある一人が、とてつもない大きいトンビマイタケを探りました。

トンビマイタケというのは、マイタケと同じように、ブナの大木や古株に群生します。上下左右に重なり癒着して大きな株になっています。煮れば、黒くなりますが、食べられるキノコです。

その他、カバイロツルタケ、ツルタケ、カワツ、ムラサキアブラシメジ、アワタケ、アケボノサクラシメジ、イロガワリ、ツエタケ、ウラグロニガイグチ、チチタケ、キチチタケ、ウスヒラタケ、キサマツモドキなどがありました。

キチチタケは、苦味があるので強火で炒めたい。水にさらしておいてから食べたのですが、大分苦いものでした。

アカヤマタケという小さいキノコは食べられますが、味を味わうというより彩りに使うことくらいでしょう。食用キノコは14・5種でし

た。

毒キノコは猛毒のフクロツルタケ、テングタケ、タマゴテングタケなどのテングタケ科がありました。この科は、壺やつばがあるので、土の中に入っている部分に注意したいものです。これらを含め十

種程の毒キノコが、ありました。その他、12・3種の食毒不明のキノコがありました。

キノコは美味しいけれど、毒のものがあるので、気をつけたいのですが、図鑑を見ても、はっきり分かりませんし、色が鮮やかとか茎が裂けるか裂けないか、ナスと煮ればいいなどと迷信めいたことが多いので注意してください。特に、クサウラベニタケはよく間違って中毒になるキノコです。

毒キノコには共通点がありません。しかし、数が少ないので覚えるしかありませんから今日のように講師先生について、勉強するのが一番でしょう。

サシバ・シデコブシをいつまでも
渥美の自然と渥美自然の会について

大羽康利

渥美半島の自然については、これまで恒川敏夫先生（故人）や倉内一二先生らが熱心に調査され各種の報告をされてきたことは皆さんご存知ことと思います。

私達「渥美自然の会」はそういった先人の先生方が明らかにして下さった知見を無駄にせず、渥美の「豊かな自然、貴重な生物を後世に残す」ことを主な目的として1988年7月に構内に住む野鳥愛好家を中心にして結成された会です。

いわゆる保護運動—署名などによる自治体や企業への要請行動—はもちろん実施しますが、私達の活動はそれのみに留まっているわけではありません。独自の調査活動—これによって新たに発見した周伊勢湾要素植物群の自生する湿地やタカ類の繁殖記録などもあります—や観察会、講演会なども開催しています。

とりわけ「渥美の自然を守れ！伊良湖伊良湖フォーラム」と題して10月に行っている講演・討論会は既に4度目を数えました。伊良湖のタカ渡りや渥美の自然を地域や広く全国の方々にも紹介しようと始めた集いですが、最近は野鳥の渡りに関する全国の方の意見交換の場とも成りつつあります。93年は10月10日に「サシバが減少しつつある」とも言われている現状にも焦点を当て、里山を守ることの重要性を訴えるフォーラムにしたいと考えています。

春には「シデコブシに関する講演・観察会」を開いています。昨年は名古屋大学の糸魚川淳二先生に講演をお願いしましたが、本年は3月28日、東北大学の菊池多賀夫先生を招こうと準備中です。

私達は更にタカ類繁殖用の人工巣や人工岩棚造りにも取り組んでいます。日本ワシタカ研究センターの中島欣也先生の指導によるものですが、小鳥に巣箱掛けをするように、タカ類にも巣箱適地を多く提供してやろうという試みです。現在日本で取り組んでいるという例は聞いていませんが、（シマフクロウなどでは報告例があります。）海

外からは成功例が多く報告されています。渥美でもつい最近までハヤブサやチョウエンボウが繁殖していたと聞いています。私達の生まれ育ったこの地にこれらワシタカ類の繁殖を甦らそうとの意味で「渥美タカのふる里計画」と呼んでいます。

渥美の自然で他に留意すべきものに、原生林状の照葉樹林、そこに生息するほ乳類や昆虫達、アカウミガメの産卵地となっている砂浜及び海浜植物、汐川干潟のシギ・チドリなど多くのものがあります。これら生物の生息環境を守って行くことがそのまま、私達地域住民が安心して暮らせる生活環境を守ることにつながっていると考えています。ゴルフ場問題に関して私達と地権者の方とが協力しあえたのはそのよい例だとおもいます。こんな気持ちを忘れずに今後とも努力を続けたいと思っていますので、宜しくお願いいいたします。

なお、当面している渥美緑道や農道問題については「山と渓谷」誌93年1月号、「自然保護」誌93年2月号に載せていただいているので、それらもご覧になっていただければたいへん嬉しく思います。

出版物のお知らせ

その1

渥美の自然の講演会記録集3

（1991年度）

B5版95頁 1冊1000円（送料260円）

内容

1. 「渥美半島の地形と地質」
池田芳雄（県自然環境保全審議会委員）
2. 「四季の彩り 渥美半島」
須ヶ原光弘（山岳、自然写真家）
3. 「伊良湖のタカ渡り 草創期の思い出」
松田輝雄（NHKアナウンサー）
4. 「渥美自然の会 活動報告」
大羽康利
5. 「遺存生物と地球の歴史」
糸魚川淳二（名古屋大学理学部教授）

その2

伊良湖のおじさんを偲んで

—故 井本保氏追悼文集—

B5版36頁 1冊500円(送料140円)

内容

辻淳夫先生の伊良湖でのタカ渡りのカウントを陰で支えて来られた民宿「井筒」のご主人、井本保さんが昨冬他界されました。この文集は井本さんを偲んで親交のあった18名が思い出を綴ったものです。伊良湖タカ渡りの調査記録の一端を伺うことでもできる内容となっています。是非ご一読下さい。

主な執筆者

辻淳夫、松田輝雄、小柳津弘、岩田郁代、…

購入希望の方は郵便振替「名古屋7-37797
渥美自然の会」までお願いします。

観察会報告

赤岩寺観察会

東三河支部 間瀬 美子

心配された前線が予報より早く通り過ぎ、季節風の吹き出しあもなく絶好の観察日和に恵まれた11月29日。

会員の出足は好調だったが、たまたま近在の学校の行事と重なったこともあって一般の参加は壮年熟年ばかり10数人の会となった。

折りも紅葉まっ盛り。例年に増している鮮やかな老楓が差しのべる枝の下と、舞台効果も満点。まず、天野さんが弁舌さわやかに紅葉のメカニズムを解説する。伐採地のハゼやウルシを見つ展望台へ。「久しぶりに来たけど、建物が増えたねえ。めだつねえ。駅はどっちかねえ。」「あれはホリデーインかね。目立つねえ。」方角を調べながら風景探訪も楽しめる。

ひところ、山肌に目立っていた松枯れの色はコナラやアベマキなど落葉樹の紅葉にまぎれてしかとはわからない。しかし、道端の枯れ木の群れには、やはり危機感を覚える。

この山のご神体、巨大なチャートの岩塊「赤岩」を取り囲むシイ・カシ等照葉樹林は昼なお暗く落葉樹林の明るさとの違いがよく分かる。ムラサキシキブやティカカズラの実を見ながら谷に下りると、城壁のような砂防ダムがそびえている。(なぜ?)

しめくくりは神戸さんのとっておきの「穴」場の紹介。今は使われてないムササビの巣と、アナグマの巣。「へえ、こんな近くに?」みんな、ただただ感心する。

こじんまりとした会だったが、みんな熱心な人ばかりで、少々高度な説明にも答えてもらえ満足感のある観察会ができたと思う。

しかし、より多くの人達に自然を感じとて貰うためには、もっと効果のある宣伝方法を考えなければと思わされた。

今年の東三河支部の観察会はこれにて終了。さあ、来年もがんばろう。



覈察會報告

尾張支部 月例観察会

尾張支部 曾我部行子

1992.10.11(日)

秋の自然観察会 漣戸市定光寺

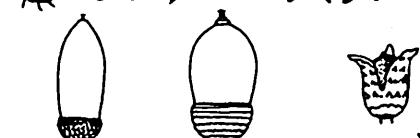
「とてのトロ」に登場
する森は、大きさは前の木が
ある神木の森。木も木も
草を繁らせる幾丈の森とも
よばれる常緑の森。足光寺の森
は深奥の大切さ。日本人のルーツ
につながる森。歩いていくとかから
べ不思議な安らぎに包まれる
種木林の楽しさとはまた別の
太古へつながる安らぎ。

木の実・草の実 しらべ

人がどうやって増えていくか一応わが
ていろいろつまらないけど、身近な草木の本尊は
どうして増えていくのかな?
本尊はある日考えて…



ヒムベリのパンツくらべ



- ・秋に葉の落ちる木…ナラ類
- ・冬も葉が緑の木…シイ・カシ類

どんぐり、どんぐりといってもいいさか違う…
何が違う? ハンツが違う! (ハンツといふもいろ)

ウロコナガのパンツ ピロートのシマノパンツ(もひき型スッホツタイプ)。あなたはどながゆうき?
◀コナラ▶ ▶ツクバネガシ▶ ▶ツブラジイ▶

自然観察施設訪問10

—ある小湿原のビジターセンター—

中西 正

そのビジターセンターは主要道路から見える場所にある。山懷に抱かれ、自然を護る施設というよりも自然に護られているというたたずまいだ。後ろに山を配し、駐車場は木々で被われ、アスファルトの地表も隠されている。誘い込まれるように入る建物は二階建てだが、外見上それほど大きく見えない。外壁は木で、モダンなデザインながら自然に溶け込んでいるためだろう。

部も木がベースで作られ、温かな感じがする。入ってすぐ右は管理室になっている。一階は二部屋に分かれ、ひとつは学校の教室よりやや広い。この中央にはこれから訪れる湿原の模型が置かれており、見るべきポイントが示されている。そのポイントのより深い内容は壁を利用して説明されている

壁の別の面は日本の有名な湿原が説明されている。今から訪れる小湿原が自然内容、植生回復実験、保護利用の点で日本の中でどのような意味を持っているか、客観的に判断できる資料である。ここには釧路湿原の気象がリアルタイムではいっている。もちろん、本湿原の気象データも常に示され、いやがうえにも日本の中の位置付けがはっきりしていく。

レインジャーによる自然情報は掲示されており、その日観察できる内容が見当つけられる。この自然情報は最近作られた中央公民館の自然室にも送られており、町の中でも情報を受けることができる。センターには少なくとも二人のレインジャーが駐在しており、展示物の説明をしているし、時間を決めて自然観察の案内をしている。このレインジャーは生涯学習の一環として自然についての講習を受けた人達である。自治体独自の認定制のもとにやりがいを持って自然解説ボランティアをしている。結果的に年配の人たちが多いようだ。展示室には輪切りの

木の腰掛けが置かれ、ちょっと休むための配慮がなされている。壁の一面は自然が飛び込んでくるように開けられている。これが展示室の広々感に役だっている。今はやりの映像機器はないが、手作りの展示が温かみを呼び、やはりヒトの問題かと感心する。

一階にあるもうひとつの部屋は広くはなく、特別展に利用されている。

二階は窓際にはプロミナーが設置され、鳥も木々も観察できるようになっている。ただ基本的には学習室であり、団体で訪れた人へのレクチャー等に使われている。

このビジターセンターは湿原だけでなく、周辺に設置された自然観察路網のセンターとしても機能している。これらの観察路は長さ、内容に色々あり、長いものは一日コースというものもある。センターは自然観察網の中央にも位置している。自然観察路の維持は別のボランティアグループが活躍している。センター設置の場所については糸余曲折があったが、地元の理解と支援のもとに最良の位置になったという。これも地元民が地元の自然を純粹に愛しているためであろう。自然保護は地元から積極的な支援があればこそといえそうだ。

このセンターでは小学生対象の自然教室も開かれる。これは他の野外施設との連係の上で行われている。市内のいろいろの情報が公民館を通じて集められつつあり、これからは地域の自然ネットワークの中心としても機能していきそうだ。観光施設というより自然保護施設、というより生涯学習における自然観察施設との位置付けが似合っているところであった。



冬の日に想うスミレ

イソスマレ

東三河支部・いがりまさし

春を待ちこがれているのは、誰しも同じに違いないが、冬も来ないうちから「早く春にならないかなあ」とため息をついているようでは、ほとんど病気の部類である。少年の日に野に咲くスミレに心を奪われてからというもの、私もその病気が治らぬまま、32回目の冬を迎えた。

スミレから学んだこと、感じたこと、とりとめもないが、冬の一日、春の野に思いを馳せていただきたい。

スミレの数

「原色日本のスミレ」（浜栄助著・誠文堂新光社刊）によると、日本に分布するスミレの種類は40種3亜種39変種75品種に交雑種75を加えて232種類、変種レベルまでに限っても82種類はあるということになっている。

この本が出たあとも、沖縄で新種のオリヅルスミレが見つかっているし、雑種に関してはその後もどんどん新しいものが見つかっている。

愛知県に現在知られているスミレの数は、諸説があるものの、24種2亜種5変種計31種類程度になる。また、さらに交雑種もいくつか知られている。そんなにあるかと意外に思われる方も多いかもしれないが、「原色日本のスミレ」に記載されているスミレの、半分にも満たないのである。

スミレのすみか

海岸から、高山まで、さまざまな所に生育するスミレだが、小さな草本なので基本的には、なにかの都合で他の植生が繁茂できず、適当に陽が当たるようになったところで、旺盛に繁殖する。海岸の砂浜や、高山の礫地などではこういった状態が安定しているので、時に大群落に

なる種類もある。前者の代表はイソスミレ、後者の代表がタカネスミレということになる。

しかし、日本の気候下では、ほとんどの所では放っておけば森林になってしまふので、支配的な植生の、いわば「スキ」をついて分布を広げているようなケースが多い。

また、人間の影響もスミレにとっては重大で、原生林よりも適当に人手の入った二次林や田園などで、よく育っていることが多い。

なかでもアリアケスミレやヒメスミレなど、人里型と呼ばれる分布をするグループがあり、人間の生活圏内に限って生育しているのは興味深い。ただ、コンクリートで固められた都会には、やはり住みづらいことは当然で、いわば自然と人間が共存しているところが、彼らにとつても住みごこちが良いのかもしれない。



アリアケスミレ

スミレの香り

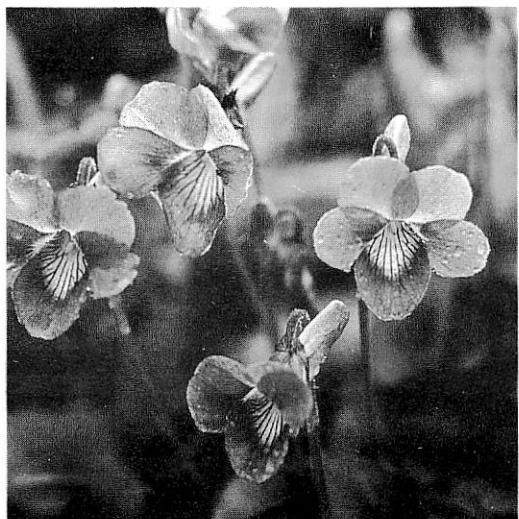
スミレのなかには香る種類と香らない種類がある。また、固体によって香る個体と香らない個体がある。また、同じ個体でも時間によって香る時間と香らない時間がある。こうなるとお手上げで、どのスミレが香りがあって、どのス

ミレが香りがないか、だれにも確かなことはいえない。

それでも香りがあるというのが定説になっているものがある。まず、ニオイスミレというのがあるが、これはヨーロッパの野性種ヴィオラ・オドラータのなかから香りの良いものを選別して、香料をとるために栽培したものなので当然強い香りがある。日本にあるものは、栽培品か、それが野性化したものである。

日本の野性種のなかでは、ニオイタチツボスミレというのがあり、これは愛知県の山野にもたくさん生えている。タチツボスミレとよく似ているので、香りがあるかどうかで種類を見分けることもできないことはないが、タチツボスミレにも香るものがあるという説もある。

その他では、シハイスミレ、マキノスミレ、エイザンスミレ、ヒゴスミレ、ノジスミレなどは多くの人が香りを認めている定説種である。私は、タチツボスミレ、アリアケスミレ、ヒメミヤマスミレなどでも香りを感じたことがあるのだが、悲しいかな標本にも、写真にもできぬ香りのことなので、客観的な証明は不可能なようである。



ニオイタチツボスミレ

スミレの閉鎖花

スミレは春に咲くものと思われているが、多くの種類は春から秋まで、次々と花を咲かせている。ただし、春の花のように人目につかない花なので、その存在に気がついている人は少ない。

閉鎖花と呼ばれるその花は、花弁が退化して萼片だけが鳥のくちばしのような形をしたままいつのまにか実になってしまう。むろん、紫でも黄色でもなく、これが花だと教えられても、にわかには信じがたい。

おもしろいことに、この閉鎖花は、春に咲く正常花に比べて結実率がいい。正常な株では、まずほとんどといっていいほど結実する。

それなのに、スミレはわざわざ春になると、結実率の悪い花弁のある花をつけるのである。我々人類へのサービスのためだろうか。たしかに、スミレが閉鎖花しか咲かせなかつたとした

ら

「山路きて／何やらゆかし／すみれ草」

人類はこんな名句をひとつ失ったかもしれない。

しかし、これには他に理由がある。一口にいえば、遺伝子の多様性を保つためといつても良いだろうか。閉鎖花での増殖は、同じ個体のめしべにおなじ個体の花粉がつくこと以外に考えられない。この増殖を繰り返せば、遺伝的形質は均一化し、多様な環境の変化に弱くなりかねない。

正常花で他の株と受粉することには、この多様性を保つという意味がある。また、時には他の種との交雑さえ行なわれている。

目先の損得に追われて、閉鎖花ばかりを咲かせるような生き方をしていないだろうか。一見むだとも思われることが、ことごとく生態的に深い意味をもつている。自然は人生のお手本でもある。



フギレオオバキスミレ

～表紙の言葉～

小鳥のさえずりで目をさまし
坪庭で咲く花とつぼに生け
お使いの道々で樹の梢、足もとの草々を
少し時間がある時は、樹木との出会いに
始めて見た時の感動を思い出し
この楽しさ　いつまでも

この二年間　皆さんのおかげで無事
過ごさせていただき有り難うございました。

後藤 春

編集部：後藤春さんは二年間にわたり、32号から43号の表紙を、時期にあわせた植物画に分かりやすい説明文を添え、飾って下さいました。長い間、ご苦労さまでした。

編集後記

★新年、明けましておめでとうございます！

今年は酉年、酉にあやかり大きく羽ばたきたいものです。会員の皆様の益々のご活躍をお祈りしますとともに、協議会活動も今まで同様に宜しくお願ひします。

★今号も多くの方から原稿をお寄せ頂き、誠に有り難うございました。とくに鈴木勝己さんの原稿は11月号にお載せする予定を私の不注意でおとし、今号になってしまいました。申し訳ありませんでした。また、前号で完了したシリーズ「なぎさと浜の考現学」の高橋康夫さん、お礼が遅れましたが、有り難うございました。

★二年間の約束でやらせていただいた私の編集も、この43号で終わりです。あれこれ試行錯誤しながらの発行でしたが、皆さんのご協力のお蔭で任を果たすことができました。心より、厚くお礼を申しあげます。

★この2年間、とくに心掛けたことは、協議会ニュースが機関紙である以上、『定期発行でなければならない。』と言うことです。そのために、急な原稿依頼をしたり、時に締切り後に原稿が届いたため、お載せできなかったりし、ご迷惑をお掛けしたこともありました。しかし、情報提供の点では以前より数歩前進したと確信しております。今後も定期発行が続き、隔月発行から毎月発行になり、『愛知の自然に関する情報はこの協議会ニュースを読めば分かる。』というようになるのが、私の夢です。

★これからのことを考え、編集者とし苦言を呈すると、まだ部会・支部・会員から寄せられる情報量が少ないということです。会員がつくる機関紙にしていくためには、もっともっとご協力を願いしたいと思います。情報の受信だけでなく発信する会員が増えればより充実した機関紙・会になります、結果として会員個人個人に、はね返ってくると信じます。

★さて次号からは伏屋光信さん（尾張支部）が編集を担当してくださいます。私にしてみればまさに神様みたいな方です。先日、名古屋で事務引き継ぎを行いました。「この仕事は協議会の仕事で一番大変な仕事だと思う。でも、誰かがやらなければならない仕事。私も随分、協議会にはお世話になっています。恩返しの積もりでやります。」との伏屋さんの言葉、感激しました。

また、年報「愛知の自然観察」の編集担当も吉田義人さんから鈴木成和さん（尾張支部）にバトンタッチされました。吉田さん、大変ご苦労さまでした。

会員の皆様、今まで以上に、編集活動にご協力を願いします。

次号（44号）の原稿締切りは2月10日です。
締切り厳守で下記までお送り下さい。

（編集部会 神戸 敦）

原稿送付先

編集部会 〒491 一宮市奥町内込 47-4

伏屋光信 ☎0532-62-5308

12月～1月の行事案内

*他支部の行事にも参加出来ますが、急な変更があるかもしれませんので照会の上、御参加下さい。

- ①主催 ②集合場所・時間 ③照会先
- ④行事のねらい ⑤参加資格・費用 ⑥備考

【1月10日（日）善師野観察会】

- ①尾張支部 ②名鉄広見線善師野駅
- ③福富裕志 ☎0568-67-0167
- ④冬鳥をじっくり見よう・メタセコイアの化石を拾おう

【毎月10日大高緑地公園自然観察会】

- ①自然を楽しむ指導員グループ
- ②琵琶池ボートのりば売店前 毎月第2日曜日9:30、第1回は1月10日（日）です。
- ③石原洋一 ☎052-624-1998
- 近藤盛英 ☎0562-93-6657
- 篠田陽作 ☎052-881-4741

⑥平成5年1月より、新しく観察会を始めます。緑区の大高緑地で行います。ここは植生も豊富で、また鳥類も多種観察できます。年間通して観察するには、楽しいフィールドです。お近くの方、是非ご参加下さい。皆さんと一緒に楽しい観察会をつくりたいと思います。春は咲き競う花を楽しみ、夏は飛び交うトンボ・蝶やクワガタ・カブトムシを追いかけ、秋はいろとりどりの草木の実や紅葉に心をなごませ、冬は寒さに耐えながら春を待つ冬芽や花芽に心躍らせながら自然の素晴らしいドラマに感動しましょう。

【1月15日（祭）名古屋支部例会】

- ①名古屋支部 ②名古屋野鳥観察館9:30

【1月16日（土）講演会】

- ①時習館高同窓会 ②豊橋市公会堂13:30
- ④東大名誉教授 高橋延清「森の世界」

【1月24日（日）東三支部総会】

- ①東三支部 ②奥浜名湖ホテル10:00
- ④平成五年度総会及び懇親会

【1月31日（日）稲武町の冬の自然探訪と奥三河支部総会】

- ①奥三河支部 ②稲武町役場前10:00
- ③石川静雄 ☎05362-2-1171
- ④稲武町の冬の自然観察と平成5年度支部総会 ⑤支部会員・総会懇親会費3000円

【1月31日（日）知多支部総会】

- ①知多支部 ②東海市農業センター10:00

【2月12日（金）1年間の記録発表会】

- ①知多支部 ②阿久比町中央公民館18:30

【2月21日（日）越冬昆虫のようすと冬芽の観察】

- ①知多支部 ②東海市市役所駐車場9:30

【2月13日（土）名古屋支部例会・総会】

- ①名古屋支部 ②産業貿易館15:00
- ④平成五年度の活動計画審議、あと懇親会

年報『愛知の自然観察』

◆原稿募集◆

昨年、創刊した、年報『愛知の自然観察・第2号』の原稿を募集しています。

内容は①自然観察の理論・方法、②自然観察会の実践、③地域の自然等の研究や④部会や支部の活動報告、⑤その他です。基本的には昨年と変わりません。

今年は字数の制限はありません。希望される方は早めに担当の鈴木成和さんに連絡をとって下さい。原稿の締切りは、1月末日（厳守）です。発行は3月の総会の日を予定しています。どうぞ、奮って応募をお願いします。

担当（申込み・原稿送付先）

〒464 名古屋市千種区下方町7-5-2

鈴木成和 ☎052-722-7844